

B-87 くせとり技術の理論的考察 ——人体計測値との関係—
文化女大家政 ○三吉満智子

目的 平面の布地を立体化する方法として縫目による構成ヒ、アイロンセットによる方法がある。アイロンセットによる方法はいせこみ、伸ばし、くせとり等、その立体曲面の種類によっていくつかの方法がある。本研究はそのうちのくせとりについて人体ウエスト部を対象に理論的背景を明らかにしようとしたものである。

方法 ①被服と人体に共通の図学的な理論を設定し、それに基いて人体計測を行ない、その結果から布地の変形量を算出した。計測はスライディングゲージによるもの（被験者15名）ヒ、石膏法（被験者6名）の展開図ヒを併用した。
②変形量算出値に対応する布地の変形の可能性についてはウールギャバジン、ウールツィードを試料としてテンションによる伸長荷重によって求めた。変形への対応のよいウールツィードを用いてワンピースを試作した。

結果 スライディングゲージによって求めた人体水平断面を重合し、それによって平面展開図を作成し、ウエストダーツ量のすべてをくせとりによるものと仮定した時の最大の布地の変形量は約33度で、3cm平方で"の対角線の伸長は24%を要することになる。布地のたて糸に要求される伸びは理論値では21%になるが、必ずしも伸びなくともくせとりは不可能ではない。石膏法による展開図では乳房下に極部的に59度という最大値が出るがワンピース試作の結果からみても必ずしも被服立体としては現実的でなく、被服立体として求められる変形角度を知るにはむしろスライディングゲージ法の結果が適していると考えられる。しかしこの2種の計測方法は、計測のし易さ、計測時間等から一長一短と思われた。